

奴隸労働写真の衝撃

ピーター・バラカン（プロードキャスター）



レンガを運ぶ奴隸労働者。50度を超える気温の中では、クリスティーンのカメラも動かなくなるので、20分ごとに車に戻ってエアコンの冷気を当て、カメラが使えるようになるまで待機しなければならなかったという。人間よりカメラのほうが良い扱いを受けているという皮肉な状況が展開する。ネパール、カトマンドゥ・ヴァリーにて撮影。

© Lisa Kristine / Human Thread Foundation

人権が完全に無視された「奴隸」的な状況で、長時間労働を強制されている人々が、世界中には数多く存在する。食物、衣服、工業製品などを通し、その安価な労働力の恩恵を被っている現代人は、彼らの現状を知らないではすまされない。奴隸労働の真実に肉薄した二枚の写真をピーター・バラカンが読み解く。

アメリカのフォトグラファー、リサ・クリスティーンは、二〇〇九年にバンクーバーのピース・サミットで行われた自身の写真展で、フリー・ザ・スレイヴズ（Free The Slaves＝奴隸を解放せよ）というNGOの支援者に会い、

現代の奴隸について聞かれます。残酷な状況を知らされた彼女は、世界各国に存在する奴隸労働者たちの写真を撮る決心をします。クリスティーンは、北中米、アフリカ、アジアなど世界中を回り、鉱山労働、売春、漁業などに従事させられる人たちを訪ね、その姿をフレームに収めます。ここに掲載された一枚目は、ネパールのカトマンドゥ・ヴァリーのレンガ窯で撮られた写真。労働者は、焼いたばかりのレンガを頭の上や背中に積み、数百メートル離れたトラックまで運びます。灼熱の太陽と窯からの熱により、気温は五〇度を超えます。熱気とヒ素などの毒物や一面に漂うホ

コリの中でも、一日一六時間を超える労働を強いられ、みな脱水症状になり、尿もまったく出なくなるそうです。父親が黒、二人の息子の手が赤と青で染まっています。染料はもちろん毒物ですから、皮膚から体内に入つていて肝臓が冒されるはずですが、何の規制もありません。織物の現場では、子どもが労働者として好まれるそうです。織機を扱う細かい作業には小さい指が適しているからです。彼らもまた、一二時間から一六時間、毎日働かされます。クリスティーンによると、現在、強制労働の犠牲になっている人が世界中で数千万人存在するそうです。彼らの多くは、少額の借金が原因で、または嘘の約束にだまされて、隸属状態に陥ります。たった一八ドルの借金のために、家族全員が無給で強制労働をさせられる、という場合もあるそうです。日本のような国に住んでいると、なぜ、このような状況から抜け出そうと

しないのか、と考えがちでしょう。しかし、彼らは暴力の恐怖の中で逃亡するという発想さえわかない状況に追い詰められているのです。教育を受けるチャンスも与えられないでの、「基本的人権」という概念を理解することもできないのかもしれません。

ここに載せられた二枚を含むリサ・クリスティーンの写真集*Bound To Freedom*（二〇一七年）を先入観なしに見たとき、どの写真もすごく美しいと感じてしまいました。とくに人物の表情の力強さには胸を打たれます。悲惨な状態を撮っているのに、あまりにきれいすぎるのでは、と一瞬疑問さえ覚えてしまって跳ね返つてくるのです。しかし、背後に隠された奴隸労働者たちの地獄のような現実を知ったとき、写真の見方が一変します。その素晴らしさが故に、被写体からの衝撃が何倍にもなって跳ね返つてくるのです。K

ピーター・バラカン プロードキャスター。一九五一年、ロンドン生まれ。「ウイークリーハンドサンシャイン」（HKS-FM）、「Barakan Beat」（InterFM89.7）などのDJを務める。自身が監修する音楽フェスティバル『LIVE MAGIC!』が、2018年10月20日（土）・21日（日）の2日間、恵比寿ガーデンプレイスで開催。livenmagic.jp